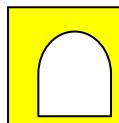


## 日吉台地下壕保存の会会報

第107号  
日吉台地下壕保存の会第16回戦争遺跡保存全国シンポジウム  
三重県鈴鹿大会盛会裡に終了

全体会での加藤二三子実行委員長の挨拶。壇上左より三重県知事、鈴鹿市長、鈴鹿市議会議長

第16回戦争遺跡保存全国シンポジウムは、8月18日と19日に三重県鈴鹿市の鈴鹿市文化会館を会場に行われ、参加者数は460名に及びました。20日はフィールドワーク2コースの見学会が行われ、共に盛会裡に終了しました。

全体会では、最初に三重県知事、鈴鹿市長、鈴鹿市議会議長の歓迎の挨拶がありました。これはこれまでのシンポジウムではなかったことで、戦争遺跡の保存運動への関心の高さと地域での地道な活動の成果を感じました。

その後、軍都鈴鹿の歴史と空襲をテーマにした朗読劇、文芸評論家の清水信氏による講演「戦争 その記憶と記録」、全国ネット共同代表の十菱駿武氏による基調報告

「戦争遺跡保存の現状と課題2012」、地域報告として浅尾悟氏の「格納庫保存問題と軍都鈴鹿」、各地報告が2本あり、

## 目 次

第16回戦争遺跡保存全国シンポジウムに終了、大会アピール	1~3p
資料 第2分科会報告 連合艦隊司令部の置かれた日吉寄宿舎の歴史的建造物認定(石橋星志、山田譲)	4~7p
報告 各分科会報告(谷藤基夫、山田淑子、亀岡敦子)	7~10p
報告 現地見学会 志摩コース(山田譲)	11p
お知らせ 第20回川崎・横浜平和のための戦争展要項	12~13p
投稿 陸軍東部62部隊兵舎を校舎として使用した思い出(長谷川崇)	13~14p
報告 第6回ガイド養成講座終了(喜田美登里)	14p
お知らせ 証言集『伝えたい 街が燃えた日々を』刊行	15p
報告 今夏のメディアに出た日吉台地下壕	15p
活動の記録 6月~9月	16p

大阪人権博物館学芸員の仲間恵子氏の「大阪の人権・平和教育～大阪人権博物館（リバティおおさか）の存続危機について～」、沖縄からは全国ネット共同代表の村上有慶氏による「沖縄県による32軍壕説明板からの日本兵による住民虐殺および慰安婦記述の削除について」が行われました。

基調報告および特別報告では、各地での人権博物館や平和博物館、戦争遺跡の説明板の根拠のある記述に対する一方的な削除など、政治介入による歴史事実の改ざんの動きや事実を継承していく難しさに関する報告が続いたのが特徴的でした。

分科会では、例年通りの3分科会に分けて行われ、全体では全国各地から 19 本の報告がありました。

最後に、来年の大会は、岡山県倉敷市で開催されることが報告され、決意表明がありました。日程案も提示されましたので、また来年倉敷大会に参加しましょう。

### 【三重県鈴鹿大会プログラム】

#### ○全体会

8月18日(土) 鈴鹿市文化会館けやきホール

開会セレモニー(けやきホール)

・主催者挨拶(現地実行委員会)

・歓迎挨拶

・朗読劇 「鈴鹿その時」(麦わら帽子の会)

記念講演 清水 信『戦争 その記憶と記録』

基調報告 十菱駿武

『戦争遺跡を平和のための文化財に』

地域報告 浅尾 悟

『格納庫保存運動と軍都・鈴鹿』

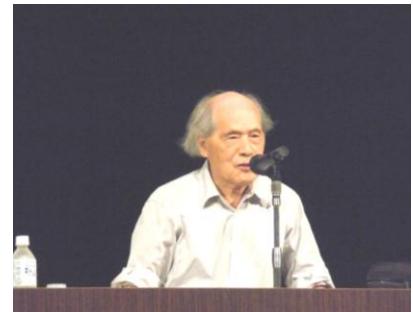
各地報告 (大阪、沖縄)

閉会挨拶

懇親会



三重県知事 鈴木英敬氏



記念講演 清水 信氏

#### ○分科会・閉会集会

8月19日(日) 鈴鹿市文化会館

分科会(途中、昼食休憩あり)

・第1分科会「保存運動の現状と課題」(第4研修室)

・第2分科会「調査の方法と整備技術」(第1研修室)

・第3分科会「平和博物館と次世代への継承」

(第2研修室)

閉会集会(第1研修室)

・開会の言葉(全国ネット事務局)

・各分科会からの報告(分科会担当者)

・大会アピール

・閉会挨拶(現地実行委員会)



懇親会での神奈川からの参加者挨拶

#### ○8月20日(月) 現地見学会(2コース)

(1) 鈴鹿と北部コース(鈴鹿市、四日市市、菰野町)

白子駅発→鈴鹿海軍工場跡(平野町)→鈴鹿海軍工廠着弾場跡→陸軍コンクリート掩体(鈴鹿市)→(昼食・イオンタウン菰野)→千種演習場跡(菰野町)→凱旋門(菰野町)→陸軍菰野飛行場指揮所跡(菰野町)→奉安殿(四日市市小学校)→近鉄塩浜駅解散

(2) 志摩半島コース(鈴鹿市、志摩市、南伊勢町)

津駅西口発→第19突撃隊迫間基地(南伊勢町:現地まで船で10分。昼食も)→小山陣地トーチカ(志摩市阿児町)→七尾田陣地トーチカ(志摩市阿児町)→越路トーチカ(志摩市磯部町)→近鉄磯部駅解散

## 大会アピール

2012年8月18・19日の両日、そして20日の現地見学と、第16回戦争遺跡保存全国シンポジウム三重県鈴鹿大会は、鈴鹿市文化会館を会場に地元三重県はじめ全国各地から460名の参加者を得て開催されました。三重県、三重県教育委員会、鈴鹿市、鈴鹿市教育委員会、ケーブルネット鈴鹿、FM鈴鹿の皆様からは後援を、鈴鹿遊技業組合様からは協賛をいただき、三重県知事鈴木英敬様、鈴鹿市長末松則子様、鈴鹿市議会議長矢野仁志様からは、歓迎のごあいさつをいただきました。また鈴鹿麦わら帽子の会の皆様による当時を彷彿させる朗読劇「鈴鹿その時」が演じられました。報道関係各社からも取材および特集を組んでいただきました。そして現地実行委員会に参加されて裏方に徹して大会成功のためにご尽力いただいた皆様、本シンポジウムに直接、間接にご参加、ご協力いただいたすべての関係者に感謝申し上げます。

今大会の開催地三重県鈴鹿市は、1942年、当時建設中だった鈴鹿海軍工廠の建設主任が働きかけ、2町12ヶ村を合併し市制が施行されました。軍主導で市制が発足した日本最初の市です。旧海軍、旧陸軍関連の諸施設が建設され、その多くが戦争遺跡として残されています。

わたしたちの目の前で、全国各地の戦争遺跡が次々に消滅、解体、閉鎖されています。当地でも鈴鹿海軍航空隊が使用していた3棟の格納庫が解体され、部材の一部を残して処分されました。戦争遺跡を保存し、平和のために活用する運動の拡充が急がれています。モノ自体は、平和を語りかけてくれません。戦争体験者の声を、戦争遺跡に反映させ、平和のために学びの場として残していくとりくみがいっそう重要になってきます。

今大会のテーマは昨年に引き続き「戦争遺跡を平和のための文化財に！」です。全国で史跡・文化財として指定・登録された戦争遺跡は8月19日現在205件に増加してきています。文化庁は分布調査および詳細調査を経て、『近代遺跡調査報告書⑨（政治・軍事）』を発刊すると明言していましたが、残念ながら未だに実現していません。一刻も早い刊行実現が待たれています。

日本政府、天皇、日本軍の行った戦争の加害の事実を否定し、無かったことにし、日本を再び戦争のできる国にしようとする反動的な動きは相変わらず根深く存在しています。沖縄では「第32軍司令部壕説明版」から県の手によって、「慰安婦」および「日本軍による住民虐殺」に関する文章が削除されました。大阪では橋下市長により「ピースおおさか」、「リバティおおさか」の平和及び人権のための優れた展示内容に対し乱暴な介入が行われ、補助金がカットされ、施設そのものの存続が危ぶまれています。河村名古屋市長による「南京大虐殺」否定発言もありました。「新しい歴史教科書」の採択を進めようとする動きも続いています。

私たちの運動は、戦争遺跡を戦争讃美の場に利用しようとする勢力との闘いを避けて通ることはできません。今大会では清水信さんから「戦争 その記憶と記録」と題して記念講演をいただきました。十菱代表の基調報告、鈴鹿、沖縄、大阪でのとりくみが報告され、私たちの運動の意義と課題が明らかにされました。分科会では、各地の戦争遺跡保存のとりくみ、ガイド活動の充実、調査活動の成果、次世代への継承のセンターとしての平和ミュージアムの建設・活用のとりくみ、街づくりのなかに戦跡保存や平和ガイドを位置づけた活動、地域の特色を生かしたさまざまなとりくみが報告されました。2日間の学習・交流と討論を通じて全国のとりくみを深く学ぶことができました。今大会での成果がそれぞれの地域、組織の活動の前進に繋がるものと確信します。

文化庁の報告書発行のいかんにかかわらず、今まで私たちが学習し、実践し、交流しながら積み上げてきた成果を力にし、広く平和を希求する人々と手を結び、全国各地で国および地方自治体等に働きかけ、戦争遺跡の文化財指定・登録、保存・活用の運動をいっそう前進させましょう。

2012年8月19日 第16回戦争遺跡保存全国シンポジウム三重県鈴鹿大会

## 資料

## 第2分科会

2012年8月19日

## 連合艦隊司令部の置かれた日吉寄宿舎の歴史的建造物認定

## —保存運動と補修前の状況を中心に—

石橋 星志・山田 譲(日吉台地下壕保存の会 運営委員)

## 【はじめに 一報告の目的と流れ】

## 目的

- ・神奈川県横浜市の日吉台海軍施設群の紹介
- ・横浜市の歴史的建造物の規定要件と日吉寄宿舎の認定理由の紹介
- ・日吉寄宿舎のリフォーム前後の状況と戦時下の使われ方の紹介

## 報告の流れ

- ・慶應義塾大学日吉キャンパス内の戦争遺跡と日吉台地下壕保存の会の紹介
- ・連合艦隊司令部の置かれた、日吉寄宿舎の概略と歴史的建造物認定について
- ・日吉寄宿舎のリフォーム前後の状況の紹介

## 【日吉台地下壕保存の会とは】

- ・1989年発足、活動24年目。会員数 個人340名、団体4
- ・慶應義塾教職員と地域住民、研究者などが集まり、立ち上げ
- ・最新会報106号、定例見学会：月1回、その他の見学会も含め年間見学者数：約2000人
- ・連合艦隊司令部地下壕ガイド、地域の戦争展参加、ガイド養成、空襲聞き取りなど多角的に活動
- ・1997年の戦争遺跡保存全国ネットワーク結成時からの参加団体

## 【日吉台海軍施設群とは (1) あらまし】

- ・横浜市港北区日吉に存在する旧海軍の使用した施設群
  - 1944年3月 慶應義塾大学日吉キャンパスの賃貸借契約を海軍と結ぶ  
キャンパス内に、同月海軍軍令部第三部、9月連合艦隊司令部、その後、海軍省人事局、東京通信隊、航空本部が入る  
連合艦隊司令部は、フィリピン作戦から敗戦までの命令を出す  
例) 戦艦大和の海上特攻
  - キャンパスの外に、功績調査部、艦政本部
- ・日吉全体の地下施設の全長：5km。連合艦隊司令部地下壕のうち約500mを学習目的のみ公開
- ・文化庁の戦争遺跡の詳細調査51件の中にも入っている

## 【日吉台海軍施設群とは (2) 連合艦隊司令部・海軍総隊司令部と人員】

- ・1944年9月29日連合艦隊司令部が日吉寄宿舎に、11月下旬から一部地下壕使用開始
- ・司令部要員は通信兵、警備兵などをふくめ当初約350名、終戦時に約1000名
- ・兵士は寄宿舎ではなく、半地下式兵舎(かまぼこ兵舎)などを宿舎とした
- ・1945年4月25日に海軍総隊司令部が編成され、連合艦隊司令長官が海軍総隊司令長官兼務
- ・5月29日豊田副武が軍令部総長に転任し、小沢治三郎が長官就任
- ・8月15日敗戦により、重要書類を焼却。米軍の指示で8月23日に目黒の海軍大学校へ移動

- 寄宿舎は連合艦隊司令部が置かれ、指揮命令を行い、玉音放送は外で聞いたという場所  
今回、横浜市の認定歴史的建造物となる

#### 【横浜市認定歴史的建造物とは】

- ・1988年4月1日に施行された、横浜市の「歴史を生かしたまちづくり要綱」に則り、所有者と合意して登録された「登録歴史的建造物」のうち、規定要件を満たし、保全すべき部位とその意匠・材料・色彩及び活用方法等を「保全活用計画」として定めたものを市長が認定
  - ・認定された建造物の保全のための改修等に必要な費用の一部が、市の助成を受けることが可能
  - ・認定件数は82件。委員は大学院教授や建築家など11名（7月1日現在）
  - ・認定要件
    - (1) 歴史的建造物登録台帳に登録されたもの（登録歴史的建造物）のうち専門家による調査により、特に価値があると判断されたもの
    - (2) 要綱により設置されている「歴史的景観保全委員」の意見を聴きながら、所有者との協議のうえ、適切な保全活用計画が作成されたもの
- 要綱 <http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/design/shingikai/rekisi/youkou.html>  
認定時の会見資料 <http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/design/press/20111014/>

#### 【日吉寄宿舎の歴史的建造物認定への感想】

- ・前提：認定は文化庁などの文化財保護行政の系統とは別立ての、町の景観保護に近い文脈にある
  - ・全国ネットの集計対象には文化財保護と異なるものも含まれ、最初の南風原町の陸軍病院壕の文化財指定も、国の認定基準とは別立てで行われた
  - ・慶應義塾が昨年の全国大会での塾長あいさつでも日吉台地下壕を「研究・教育資源」と位置づけ学習目的での公開に配慮し、すでに10年以上、保存の会に許可を出し、見学会を継続している
  - ・認定歴史的建造物となるには、所有者と市の協議を経て、保全活用計画が策定されることになっており、それを進めたことは慶應義塾の保存への姿勢として大きな意味がある
  - ・日吉台地下壕保存の会では、過去に2回、塾長宛に日吉ミュージアム計画を提案し、寄宿舎を地下壕を含むミュージアムとする構想があり、寄宿舎の保全はその方向性とも合致する
- 結論：慶應義塾の前向きな対応として、文化財保護とは別の立場の認定だが、評価したい

#### 【日吉寄宿舎の建築史的な価値】

- ・設計者は谷口吉郎。日本のモダニズム建築の開拓者。文化勲章も受章 代表作)藤村記念堂
- ・日吉寄宿舎は初期の作品(東京工業大学助教授時代)、慶應義塾関係では幼稚舎に続く建物
- ・欧米の建築の動向も踏まえ、学生の理想の寄宿舎として構想を練る
- ・外壁は全面タイル張り。屋内の入口ロビー、廊下も細かなタイル張り
- ・風呂棟はボイラー室と浴室部分から成り、浴室は円形で全面ガラス張り。浴槽も円形で周りにあざやかな紺色の円柱が立ちならび、屋根は銅葺きというしゃれたデザイン。通称ローマ風呂
- ・その他、全室個室で完全洋式、床暖房完備と戦前の学生寮としては、とてもユニーク

※戦前からの日吉の校舎・施設は、著名な建築家によるもので、第一、第二校舎は曾禰中條建築事務所（他の代表作に、三田キャンパスの図書館など）、チャペルはヴォーリス事務所（近江兄弟社を作った、ウイリアム・ヴォーリスの建築事務所。他の代表作は関西学院大学など）の設計

→ 上記の日吉の建物はすべて、海軍によって使用される

#### 【日吉寄宿舎の歴史 (1) 建築時の状況】

- ・1934年に慶應義塾日吉キャンパス開設。大学予科の校舎および競技場などが置かれる
- ・1937年に谷口吉郎設計の日吉寄宿舎完成。秋頃から入居開始、人気で抽選もあった  
→ 南寮、中寮、北寮の3棟から成り、鉄筋コンクリート3階建て。各棟40の個室  
1部屋は約6帖の洋室。全室南向き、床暖房があり、ベッド、机、洗面台が作りつけ  
共同設備はトイレ（洋式便器の水洗式）、各棟1階の食堂、別棟に風呂棟  
寮費年間180円+毎月の食費20円（のち22円）  
参考）当時の大卒初任給30円  
雑誌等に取りあげられ、慶應義塾も「東洋一」を誇り、積極的に紹介か

#### 【日吉寄宿舎の歴史 (2) 連合艦隊司令部として使われた日吉寄宿舎】

- ・アジア太平洋戦争の戦況悪化に伴い、1943年には学徒出陣。在校生も勤労動員へ
- ・慶應義塾は海軍に土地建物を貸与。1944年9月29日に連合艦隊司令部が寄宿舎に入る
- ・将官は南寮（司令長官は2階に特別室）、幕僚の佐官は中寮、尉官は北寮に居室を持つ
- ・中寮食堂が作戦室、北寮食堂が手術のできる医務室となる
- ・寄宿舎の前から階段でつながった地下壕内の通信室、地下作戦室、長官室と一体で使用

#### 【日吉寄宿舎の歴史 (3) 戦後の日吉寄宿舎】

- ・1945年9月6日に進駐軍が日吉キャンパス全域を接收。1949年10月1日に返還
- ・返還後、中寮は学生寮としての利用を再開。北寮は研究室、書庫として使用
- ・1964年に研究室、書庫は日吉駅寄りのキャンパス中枢部に移転
- ・南寮、北寮とも空き家のようになり、次第に荒廃
- ・中寮には寮生がいるため、プライバシーの観点から見学会では、遠望での見学を続ける

#### 【日吉寄宿舎 南寮のリフォーム前後】

- ・1964年以降中寮以外はほとんど使用されず、1984年段階で外見の劣化が相当ある
  - ・歴史的建造物認定を受け、2011年10月より南寮を建築当時の外装に修復しつつリフォーム  
→ 10月1日、保存の会として初めて、工事前に内部見学の機会をいただく
  - ・改修以前の様子は、文献とほぼ同様で、一部最近まで使われていた部屋を除き、ガラスの破損、建具のさび付き、ひさし等の破損、タイルの剥落が広範囲に見られ、ほぼ廃墟化していた
  - ・リフォーム完成後、中寮の寮生は2012年5月に南寮に移動、保存の会も再度5月12日見学
- ★以下、スライドショーで完成時、改修前、改修後の状況を確認

## 【今後の課題】

- ・風呂棟について：改修工事はまだ実施されず
- ・中寮、北寮の活用と日吉ミュージアム計画について：検討中
- ・文化庁の文化財指定の方向性について：こうした事例を評価しながら、報告書刊行への流れを
- ・新たな文献資料の搜索と、日吉寄宿舎の使われ方、日吉台地下壕の作られた背景などの検討
  - 関連する資料の一層の収集と、日吉との関わりを意識して、日吉から描く連合艦隊司令部や海軍施設群の役割や敗戦を検討したい

## 【参考文献】

- ・横浜市教育委員会事務局社会教育部編『横浜・港・近代建築』（横浜市教育委員会、1984）
- ・白井厚監修、日吉台地下壕保存の会編『フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』第2版（平和文化、2011）
- ・横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ』第2巻（下）（横浜市、2000）
- ・中田整一監修、淵田美津雄『真珠湾攻撃総隊長の回想 淵田美津雄自叙伝』（講談社、2007）
- ・「日吉台地下壕保存の会会報」

## 【補足資料】認定時のプレスリリース（掲載省略）

出典：<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/design/press/20111014/>

## 報 告

## 第1分科会報告

谷藤基夫

## 分科会テーマ「保存運動の現状と課題」（最大24名参加）

司会、進行、分科会報告（新井、東海林、谷藤）

- ①「フィリピンの戦争遺跡」 戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会（福林徹氏）
- ②「戦地（旧満州、東寧、あん陽）の日常生活を描いた水彩画の提供を受けて」  
貝山地下壕保存する会（原田弓子氏）
- ③「横須賀及び周辺の特殊地下壕の実態」 貝山地下壕保存する会（池田直人氏）
- ④「地域住民との共同ですすめる亀島山地下工場の保存運動」  
亀島山地下工場を語り継ぐ会（村田秀石氏）
- ⑤「ツール（写真・絵・図など）や模型を利用してのガイドの工夫」  
松代大本營の保存をすすめる会（久保田雅文氏）
- ⑥「すすむ登戸研究所の活用・聞き取りなど一新たな活動を始めた保存の会一」  
登戸研究所保存の会（森田忠正氏）

①「フィリピンの戦争遺跡」「戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会」（福林徹氏）は本年1月「アジア太平洋戦争70周年フィリピン平和ツアー」を実施しました。マニラ、バターン半島、コレヒドール島、レイテ島などの戦争遺跡の映像による詳細な報告でした。フィリピンの放置された戦争遺跡、日本の慰霊、鎮魂碑の数々、米軍による整備された戦争遺跡群とフィリピンの戦争遺跡が置かれた実態が報告されました。日吉台の司令部からマニラ作戦の司令が出された歴史を思うと日吉でも海外とのつながりを考えていく参考になる発表でした。

「貝山地下壕保存する会」から2本の報告がありました。

②「戦地（旧満州等）の日常生活を描いた水彩画」（原田弓子氏）の発表では年一回「戦跡写真コピー展」を実施する中で手に入れられた水彩画の紹介がありました。写実的な描写の細かい作品の数々で陸軍内部の日常が詳細に描かれています。作者や入手先など不明な点が多いため、今後その点について調査されるよう要望がありました。

③「横須賀周辺の特殊地下壕の実態」(池田直人氏)

では横須賀市周辺に多数存在する地下壕を中学校のころから実地踏査した報告がなされました。とりわけ貝山、比与、夏島などの地下壕について映像での詳細な報告で、関心がもたれるものでした。「特殊地下壕」という用語は、国土交通省関係の用語であり、保存運動の関係としては使用しない方が良いのではないかという指摘がありました。

④「亀島山地下工場を語り継ぐ会」(村田秀石氏)

からは「地域住民との共同ですすめる保存運動」として三菱重工水島航空機製作所の疎開工場として

掘削された地下壕の建設の過程とこれまでの調査・保存・公開運動の経緯、地域との共同の活動報告がなされました。岡山県倉敷市は来年度のシンポジウム開催地であり、地下工場保存に向けて、大きな前進をもって大会に臨みたいとの力強い表明がなされました。

⑤「松代大本営の保存をすすめる会」(久保田雅文氏) 年間10万人からの松代象山地下壕見学者のうち2万5千人近くを案内する本会は20人足らずの60台後半のガイドで運営され、ガイドの増員が急務とされています。そのためガイド養成講座や研修講座が実施され、またガイドの際地下壕の掘削過程をトロッコやダイナマイトなどの模型を使っての子どもたちにも分かりやすく説明できる工夫が報告され関心を呼びました。日吉保存の会より大きな活動をしている松代の報告はそれらの工夫も含めて参考にしたいものでした。

⑥「登戸研究所保存の会」(森田忠正氏) 明治大学生田キャンパスにある登戸研究所資料館は開館以来2年間で2万人の見学者になろうとしています。本会は発会から5年目に「保存の会」として新しくスタート、川崎市多摩区長への申し入れや地域の各種行事への参加、写真展、戦争展の実施、国の登録文化財を目指して活動しています。資料館と協力して共同聞き取り調査や研究活動も行われ、研究所と地域との関わりなど資料館にはできない調査活動を進めていく抱負が述べられました。

発表終了後の全体討議では、会の運営・会計や見学の際の安全管理の問題などの情報交換が行われ、それぞれの会で様々な工夫が行われている様子が明らかになりました。最後に来年の岡山での再会を確認して終了しました。

報 告

第2分科会「調査の方法と整備技術」報告

山田淑子

第2分科会では「調査の方法と整備技術」をテーマに8本の報告が行われました。

1 「大正飛行場の水濠」

河内の戦争遺跡を語る会 大西進氏

大正飛行場は、昭和16年中国・四国の東部から阪神と名古屋・東海におよぶ「第11飛行師団」司令部が置かれた飛行場である。水田を強制的に買い上げたため、排水が必要となり、周りに水濠が作られた。これは、調査研究によると中近世の城郭の掘割さながら地上攻撃に対する障壁となり防衛機能の役割を果たしていたと考えられる。この水濠の現状は、道路や団地の敷地に転用されたりしているが、一部残っている水辺等を緑地公園とし、戦争の産物として残していきたい。

2 「67年たっても残る13個の250キロ爆弾坑」

浅川地下壕の保存をすすめる会 中田均氏

1945年4月4日午前2時半～4時半にかけて米軍B29爆撃機が立川飛行機を目標に250キロ爆弾を投下し、立川、日野、八王子が被害を受けた空襲の爆弾坑13個の調査を八王子市犬目町で行い、現在でもその跡がくっきりと残り、全国でも珍しい事例になっている。



第1分科会で報告する原田さん

## 3 「戦禍に巻き込まれた梵鐘」

戦争遺跡研究会 清水啓介氏

1941年8月30日公布の金属類回収令により梵鐘が強制回収され、調査によると鐘楼のバランスを保つため梵鐘の代わりにコンクリート製、石製、陶製、自然石等の代替品を吊り下げ現在もそのまま残っているものがある。また、供出されたが兵器用に溶解されずに戻ってきた帰還梵鐘の状況調査、被爆梵鐘等について報告され、各地域での梵鐘調査の依頼もあった。

## 4 「本土決戦下の群馬」

戦跡考古学研究会 菊池実氏

本土決戦下の群馬県における1944年7月からの軍隊の移駐について、県立学校2校、国民学校10校を調査した。作戦軍の移駐と防空部隊や後方部隊の配置、軍施設の疎開、食糧増産の部隊など多岐にわたっていることが確認でき、国民学校等の校舎が兵舎や工場の一部になり、その足跡が数多く残されていることが報告された。

## 5 「戦争遺跡調査における米軍資料の活用」

空襲・戦災を記録する会全国連絡会議 工藤洋三氏

戦争遺跡の調査において米軍の写真偵察機が戦時中撮影した航空写真が最も効果的に活用できることを「徳山要港防備図」を手がかりに行った調査を中心に報告がなされた。膨大な「米軍資料」をアメリカの情報公開制度によって取得し、解析する労力とともに日本側の資料との比較対照が必要となることも報告された。

## 6 「連合艦隊司令部の置かれた日吉寄宿舎の歴

史的建造物認定—保存運動と補修前の状況  
を中心に—」

日吉台地下壕保存の会 石橋星志氏・山田譲氏

連合艦隊司令部の置かれていた日吉寄宿舎が横浜市の「歴史を生かしたまちづくり要綱」の規定により歴史的建造物の認定を受け、保存改修ため市から助成を受けてリフォームが完成し、保存活用されていることが報告され、寄宿舎のリフォーム前と後の状況についてスライドを含めてわかりやすく紹介された。

## 7 「『戦争遺跡の跡』の調査 高知城の山にあった10の戦争壕の調査」

平和資料館・草の家 藤原義一氏

「高知城に掘られた防空壕について調べています」という投書を高知新聞に送り、掲載されたところ、情報が寄せられてこれを基に現地調査を行い、戦争中に掘られた横穴壕が埋められている共通の工事跡が発見され、その数、戦争遺跡の跡の現状、全体像を把握することができたという報告がされた。この際、地方紙やNHKを利用することにより情報が集まり、「戦争と平和を考える資料展」としても紹介することができた。

## 8 「アジア太平洋戦争中の強制連行・強制労働による韓国人被害者への聞き取り調査について」

松本強制労働調査団 小島十兵衛氏

2001年11月、2011年12月、2012年3月と3回にわたる韓国への強制連行・強制労働被害の聞き取り調査について、調査対象者も高齢になり、証言も曖昧になり、調査自体が困難になってきている現状が報告された。また、韓国側も本格的な被害調査をあまり行なわず支援金の支給で終了を考えているようであり、日本側はもとより政治決着をしていくことで何もしていないが、民間の「真相糾明ネットワーク」により今後も活動を続けていくことが報告された。

## 【感想】

「調査の方法と整備技術」がテーマであるが、そのテーマにそくしてというより「調査」に関しての報告になった。それぞれ興味深い内容で、戦争遺跡を保存していくためには現状



第2分科会での石橋・山田報告の様子

の調査が前提となり、戦争遺跡として残存しているものが徐々に消えかかっているが、調査により掘り起こすことができる戦争遺跡がたくさんあるというヒントをもらった。しかしながら、掘り起こした戦争遺跡を後世に残すためには、「物」だけでは伝わらない。どのようにして「物」を生かして、「魂」を込められるのかは、今後の活動に掛かってくる。

「日吉の寄宿舎」の保存運動の報告は、石橋さんと山田譲さんが行ったが、レジュメは明解でスライドを含めビジュアルに訴えて保存の会の活動や歴史的建造物に認定された過程を丁寧に説明した。また、「認定」はいかにしたら受けられるのかという質問に対しては、各地の自治体の取り組みとも関係するので、その点を検討する必要があると思った。

## 報 告

### 第3分科会「平和博物館と次世代への継承」報告

亀岡敦子

第3分科会は、もっとも戦争遺跡保存ネットワークの特徴を現す分科会とも言えます。たとえ戦跡が破壊を免れ保存されたとしても、調査研究に裏付けされた事実を知った上で、その戦跡の持つ意味を次世代に伝えなければ、歴史を学ぶ場にはならないからです。それぞれの地域性に密着した興味深い5本の報告がありました。

#### 1 「うちんく（わが家）にあった戦争－平和資料館・草の家 企画展」

高知平和資料館・草の家 太田紘志氏

民営平和資料館「草の家」（高知市）が、広く市民に「戦争の痛みと想いを伝えるもの」の提供を呼びかけ、集った200点の寄贈品で企画展をひらいた。今年は13の企画や取り組みがある。

#### 2 「瀬戸市の戦争遺跡－市民が戦争に駆り出された時代の証言者たち－」

瀬戸地下軍需工場跡を保存する会 寺脇正治氏

瀬戸市内の戦争遺跡や遺産全体を、平和のための博物館として伝承するための取り組みを始めた。供出の梵鐘のかわりに陶器の梵鐘が残されているなど、瀬戸市の特色である。戦蹟巡りコースをつくり、「ぼくの町にも戦争があった」という事実を知って欲しい。

#### 3 「七里岩地下壕を平和教育に」

垂崎七里岩地下壕を保存する会・山梨県戦争遺跡ネットワーク 向山三樹氏

長く、「戦争体験者からの聞き取り」が戦争を学ぶ中心であったが、すでに子どもの祖父母の多くが戦後世代となり、七里岩地下壕など身近な戦跡を是非学びの場としたい。行政の認識は「特殊地下壕」「危険地下壕」であり、入坑が簡単には許可されない問題がある。

#### 4 「松本市立旭町中学校との総合学習の取り組み」 松本強制労働調査団 平川豊志氏

学校が、連隊の練兵場跡地に建てられたことから関心を持った旭中学校の先生方と、3年間研修を続け、総合学習で中学生のビデオ製作にまで発展した。3年前の全国シンポジウムがこの学習の契機となった。

#### 5 「第32軍司令部壕で何を語るか」

沖縄平和ネットワーク 吉川由紀氏

沖縄には県民の戦場体験継承のために、戦争遺跡を活用してきた歴史がある。平和学習に訪れる人びとに、書き換えられた説明板や、資料展示などをどのように説明すればよいのか、問題と直面している。



第3分科会 寺脇さんの報告の様子



第3分科会 吉川さんの報告の様子

## 報 告

鈴鹿大会・現地見学会 志摩コース  
きれいな海と虚しい「本土決戦」陣地

山田 譲

- ①迫間（はさま）「海竜」基地（海軍第4特攻戦隊第19突撃隊）  
 ②陸軍小山（こやま）陣地トーチカ      ③陸軍七尾田（ななおだ）陣地トーチカ  
 ④陸軍越路（こじじ）陣地トーチカ

8月20日、快晴の夏空の下、三重県志摩半島の戦争遺跡を鈴鹿大会実行委員会の皆さんに案内していただきました。まず向かったのは、志摩半島南部五ヶ所湾内の迫間（はさま）にある二人乗り特攻潜水艇「海竜」を格納する予定だった横穴式の壕です。ここは陸路では近づきにくく、生簀釣り店ハルキチ屋さんに船を出してもらいました。

見学した壕は2本あり、1本はコンクリートでつくられ、もう1本は未完成で入口のそばだけコンクリート。中は素掘りのままで奥は掘りおわっていないようでした。高さ・幅3m位、長さは50mはあったでしょうか。礫岩のもろい岩質ですが、手掘りでこの大きな壕を掘るのはたいへんな労力だったとおもいます。これは海軍設営隊ではなく地元の郷土防衛隊が動員されてつくったとのことです。地下壕はこのほかに、発電室用など4本が残っていてほかに崩落した壕もあります。なぜか「海竜」壕の入口にイノシシの子どもの死骸があり、ビックリ。そのあとハルキチ屋さんに船でもどり、生簀の鯛をさばいてもらうのを待ちながら湖のように静かな湾内のきれいな海をながめ、気持ちのいい海風にあたっていました。すると釣りをしていた女性が突如入れ食いで、あっという間に2~3kgのハマチが5匹も釣れてしまい、またビックリ。このハマチもみんなでおいしくいただきました。

このあと志摩半島南東部のトーチカ群を見学しました。トーチカはいずれも幅4~5m、高さ2m位で、銃眼が1つか2つ、ついています。ここに軽機関銃をすえつけたようです。見学したのは海岸の砂浜の奥の斜面につくられたトーチカ。海岸から1kmほどの丘の上のトーチカ。内陸部の山の稜線を貫通するトンネルの先につくられたトーチカです。

分厚いコンクリートのトーチカは何やら頼もしげですが、こんなにパラパラと散在していたのでは、ちょっと横から回り込まれてすぐ潰されてしまいそうです。そもそも米軍が志摩半島に上陸作戦をしかけるという想定自体、絵空事のようにおもいます。ガイドの岩脇さんの話では「海竜」の基地も、かんじんの「海竜」は部品不足でちっとも出来上がらず敗戦まで地下壕は空っぽのままでした。発電機も通信機も未装備のまま。「震洋」（モーター・ボートの特攻艇）はなんとか48隻そろえることができたそうですが、フィリピンでは米軍は船のまわりに丸太を浮かべて防御。これでもうお手上げだったそうです。

特攻戦隊とか突撃隊とか名前だけは勇ましいのですが実体は空っぽ。むしろ空襲で戦意を失っている国民の引き締めのための陣地構築だったのではないでしょうか。軍部権力者のとなえた「本土決戦」体制というものが、全面的な敗退という戦局を無視した単なる敗戦ひきのばしでしかなかったことが、この志摩半島の戦跡からもわかる気がします。しかしそのために、たいへんな労苦をさせられた地元の郷土防衛隊や兵士の気持ちはどんなだったでしょうか。

ていねいなガイド説明をしていただいた岩脇さん、詳細な資料を作成してくれた若手研究者の山本君、ご案内いただいた皆様。とても興味深く、考えさせられるフィールドワークでした。ありがとうございました。



## お知らせ

## 第20回 川崎・横浜 平和のための戦争展2012 実施要項

## 1、趣旨および経緯

1992年12月、私たちは第1回川崎・横浜 平和のための戦争展を、ここ川崎市平和館で開催しました。登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕・日吉台地下壕の、調査研究と見学案内を別々に行っている団体と個人が実行委員会をつくり、多くの人に、これらの戦争遺跡の存在を知ってもらい、保存活用の道を見つけるためでした。今も稀少ですが、20年前は「平和館」と名づけられた施設をもつ地方自治体は川崎市ぐらいで、画期的ともいえる「平和」を推進する事業を始めました。開催地は川崎と横浜の一年交代ですが、川崎の場合は、毎回川崎市平和館で行っています。私たちの企画に一番ふさわしいと思われるからです。そして川崎市は一貫して「後援」という形で、応援してくれています。

私たちが保存活用の活動に関わっている登戸研究所・日吉台地下壕・蟹ヶ谷通信隊地下壕は、その規模と意味合いにおいて、全国でも屈指の戦争遺跡とみなされています。文化庁としても重視していることは、すでに明らかにされています。

慶應義塾大学に海軍がはいった日吉台地下壕と、その跡地に明治大学がきた登戸研究所とでは、経緯は異なりますが、両遺跡とも、日本有数の私立大学内にあることは共通しています。また、そのことが破壊を最小限に止めてきたことは、疑いようのないことでしょう。

最高学府である大学は、学問の研究と教育の場であり、近年「地域の教育と文化の発信地」としての役割が特に重視されています。その観点からみると、最近両遺跡の見学が急増し、特に小学生から大学生や一般市民の平和教育に、最適の地と認識されはじめたことは、自然な流れといえます。日吉台地下壕には、近隣の小中高校だけではなく、修学旅行として見学に来る中学校もありますし、様々な大学の見学もふえています。

2010年春、明治大学が登戸研究所であった細菌兵器を研究した建物を、そのままに近い形で残し、「明治大学平和教育登戸研究所資料館」として一般公開したことは、戦跡保存運動にとっても、大学にとっても歴史的なことではないでしょうか。すでに参観者が2万人を超しました。そして2万人目として見学したのが川崎市の稻田中学校の生徒たちだったという点も地域の人たち、それも若い人たちに戦争の記憶が継承されていることに注目したいと思います。さらに慶應義塾大学はじめ、戦争の跡が残されている大学は少なくありません。それをどう扱うかは、大学だけではなく、市民の課題であるといえましょう。

戦争が終わって67年すぎました。それでも地域には戦争の傷跡がまだいっぱい残っています。川崎市平和館のある川崎市中原区では「川崎中原の空襲・戦災を記録する会」が地域の戦時下の様子や空襲被害の状況を大勢の人からの聞き取り調査で明らかにしてきました。こうした成果も今回は展示します。そこで私たちは、今年のテーマを「日本が戦争をしていたころーそのとき川崎・横浜では」と決めました。今年は、従来の記念講演や展示、シンポジウムと若者の発表のほかに、10月27日には舞台と客席一体となり、戦争の記憶の継承の大切さを歌で確認したいと思います。

皆さまのご来場お待ちしています。

## 2、テーマ

《 日本が戦争をしていたころーそのとき川崎・横浜では 》

## 3、主催・後援・実施団体

主 催 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会

後 援 川崎市(予定)

実施団体 登戸研究所保存の会

日吉台地下壕保存の会

蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会

川崎中原の空襲・戦災を記録する会

## 4、代 表 姫田光義 登戸研究所保存の会共同代表・中央大学名誉教授

副 代 表	大 西 章	日吉台地下壕保存の会会長・慶應義塾高等学校教員
	新 井 摳 博	戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員・蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会代表・日吉台地下壕保存の会副会長
	大 図 建 吾	登戸研究所保存の会共同代表
	渡 辺 賢 二	登戸研究所保存の会共同代表・明治大学講師
顧 問	白 井 厚	慶應義塾大学名誉教授
5、開催日程	2012年10月27日(土) 9時～28日(日) 16時	入場無料
6、会 場	川崎市平和館 川崎市中原区木月住吉町33-1	電話 044-433-0171 東急東横線およびJR「武蔵小杉駅」から徒歩約10分 東急東横線「元住吉駅」から徒歩約10分
7、内 容		
○展 示	10月27日(土)～28日(日) 9時～16時 戦争遺跡の写真・実物資料・中原空襲の記録 他	
○文化行事	「再生の大地」合唱団 10月27日 13時～14時	
○シンポジウム	「戦争と地域、そして戦争の記憶の継承」 14時20分～16時	
○若者の発表	「戦争の記憶をどうひきつぐか」 10月28日 10時～12時	
○記念講演	10月28日 13時～15時30分 演題 「語り継ぐ平和への想い — ある作家の体験から」 講演者 早乙女勝元氏 作家、東京大空襲・戦災資料センター館長	
8、関連行事	日吉台地下壕見学会 12月15日(土) 横須賀・三浦半島の戦争遺跡を訪ねるバスツアー 9月30日(日)、10月14日(日) 明治大学平和教育登戸研究所資料館見学会 10月 6日(土)	
9、運 営	実施団体で実行委員会を組織し企画運営にあたる。	
10、連絡先	亀岡敦子 T&F 045-561-2758 森田忠正 T&F 044-911-2726	

## 投 稿

## 「陸軍東部 62部隊兵舎を校舎として使用した思い出」

長谷川 崇

1945(昭和20)年4月15日京浜地区大空襲のため、川崎にいた中学1年生の私は、家・学校・市街地が焼け野原となり、その後の授業は市内の小学校(向小学校、桜本小学校)等を間借りして続けられました。

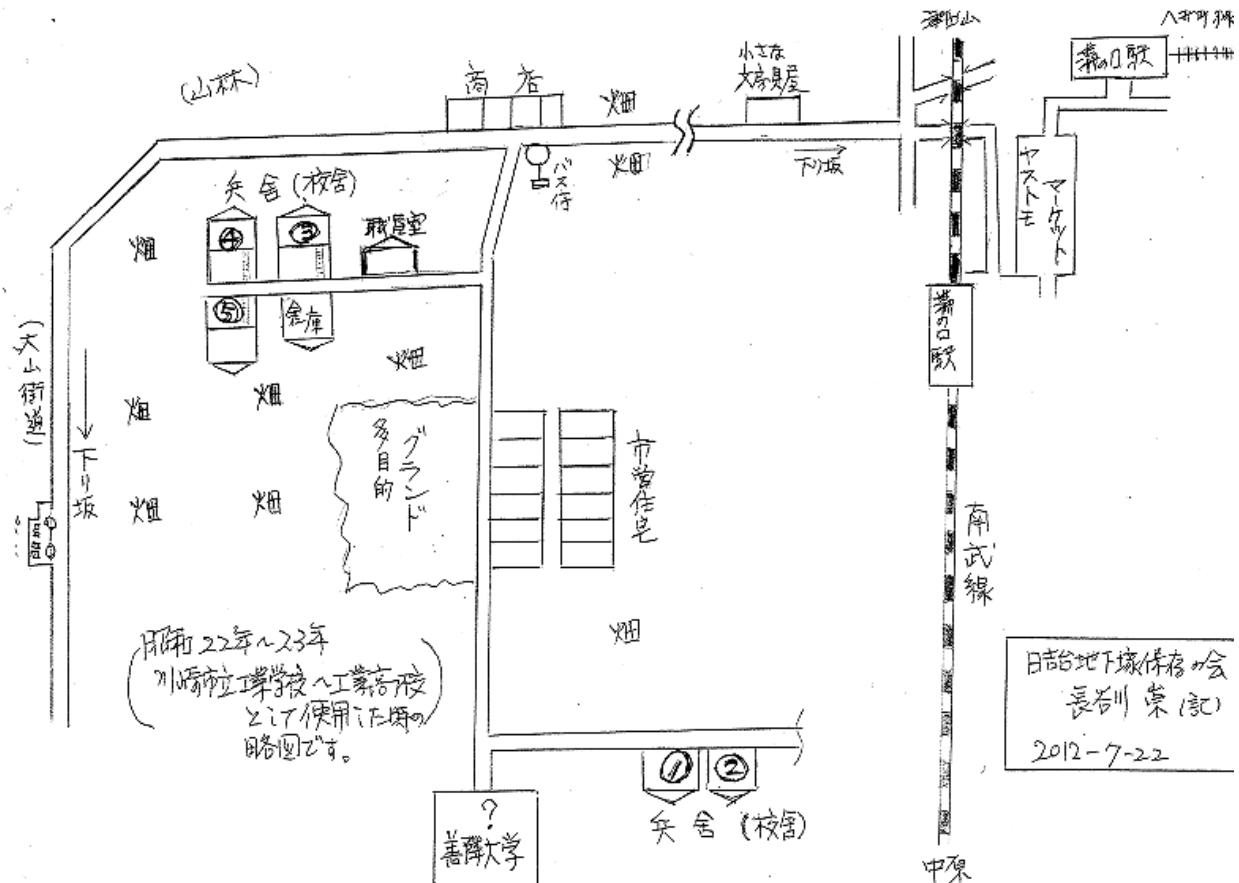
その後1947(昭和22)年になり、川崎市馬絹にある62部隊兵舎を校舎とすることになり南武線溝の口駅より徒歩30～40分の砂利道を通学しました。当時、履物は殆ど下駄または高下駄(2枚板)を履いていて、砂利道のため2～3ヶ月で交換する有様でした。また、車が通ると砂埃で前が見えなくなる程でした。(編者注: 詳細は次頁図も参照。数字と建物が対応)

初めはバス停より分かれて一番奥の兵舎①②を使用しましたが、部屋の板を剥がしたら小さな虫がいっぱい出てきて衛生上悪いとの事で、入り口に近い③～⑤の兵舎に移りました。まず右側の平屋を職員室に使い、二階建て兵舎三棟を校舎にしました。各室には3m×1.5mのテーブルがあり(汚れていた)、木の長椅子4人がけで使用しました。その時、窓を見たらガラス窓でなく、竹の網にろう紙が張られていてびっくりしました。ある時鉛筆で突ついたら穴が空き、風雨の強い時は吹き込んできました。

左側の倉庫に入ったら銃剣術用の防具が山ほど積まれていて、後で布の部分を切り取り丸めて野球のボールを作り毎日早弁で昼休みを楽しんだものでした。また、校舎より遠方の畠の奥からバスが見えて、時々走ってバス停に行き利用したことがありました。

その後、私たちは平間にある県立川崎工業高校(現在の川崎工科)と合併になり、1951(昭和26)年卒業となりました。

☆今回、登戸研究所保存の会の中島せり奈様より現地フィールドワークのご案内を戴き、参加いたしました。64年前の思い出が昨日のように思えて投稿しました。



## 報 告

第6回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座終了 新ガイドも活動開始

喜田美登里

日吉の戦争遺跡について深く知り、考え、案内できるガイドを養成する本講座は、2005年にスタートして6回目になります。今回も15名の熱心な受講生を迎え、保存の会の運営委員・ガイド共々3月から7月まで学習・フィールドワーク・討論などを行い、月1回計5回の講座を無事終了しました。

今回は日吉の空襲や連合艦隊司令部の置かれた寄宿舎など日吉台地下壕関係の話や見学会までの段取りや手続き、実施時の詳細、保存の会の活動案内を中心にプログラムを組みました。時代背景としての近現代史を入れられなかつたのは残念ですが、5回の講座に加え、毎月1回の定例見学会への参加でガイド実習を行いました。結果として実際のガイドに早く親しんで頂けたと思います。

年々見学案内の希望件数が増加し、さらに多くの地下壕ガイドが必要とされています。講座で頼もしい仲間がまた増え、現在6名の新ガイドが地下壕見学会に参加されています。☆講座で使用した資料は、逐次会報に掲載していきます。



新井副会長から修了証が各受講生に手渡された

## お知らせ

証言集 『伝えたい 街が燃えた日々を 戦時下横浜市域の生活と空襲』  
刊行 (小野静枝・手塚 尚編、横浜の空襲を記録する会)

日吉台地下壕保存の会では、日吉周辺の空襲について以前より調査を続け、被害の実態については見学会などでも紹介してきました。2009年から2年間は、横浜の空襲を記録する会の小野静枝さんや手塚尚さん、手塚優紀子さんと共同で、東横線沿線の空襲について共同研究し、相互の調査成果を突き合わせ、検討しました。

小野さんは横浜大空襲を体験され、当時のお宅は大倉山にありました。戦後、編集に関わられた『横浜の空襲と戦災』でも、作成時の制約もあり郊外部分の記述が不十分であることから、個人的に補完する意味で、東横線沿線を中心とするエリアの聞き取りや調査を続けておられ、そうした中での共同作業でした。

横浜の空襲を記録する会は、毎年5月29日に証言集会を開催しており、そこで寄せられた証言と小野さんの集めた証言や調査結果を合わせて、今回『伝えたい 街が燃えた日々を』を刊行されました。特徴としては、都市空襲とその周辺の空襲の関連を示す内容になつてい

ること、今回は空襲だけでなく、空襲前後の戦時下の生活の様子についても触れた証言が多いことが挙げられます。また、事実理解に必要な注釈も適宜加えられています。文中、空襲の未解明な部分や課題は多いとあります、成果や思いを受け止め、活かしたいと思います。

まだ、残部があるということで、ご希望の方は手塚尚さん（TEL&FAX 045-242-5257）までお申し込みください。1冊送料込みで1000円で、複数注文も可能です。郵送の際に同封する振り込み用紙で支払いをお願いします。

## 報 告

## 今夏のメディアに出た 目吉台地下壕

石橋星志

戦後67年目の今夏も、戦時下の諸相が新たに報道されました。日吉台地下壕保存の会でも、8月上旬に合わせて5回の見学会を行い、多くの参加者を得ました。7月26日の見学会には日本経済新聞の記者も取材で同行し、8月13日に記事が掲載されました。

8月15日にはNHKの首都圏ネットワークで、会員で以前に総会で講演していただいた土方直彦さんの証言が放映されました。この取材には保存の会も協力しました。

また、8月14日には今回ご紹介した『伝えたい 街が燃えた日々を』についても含めTBSのイブニングファイブで横浜大空襲が取りあげられ、小野静枝さんの話が放送されました。



## 活動の記録 2012年6月～9月

- 6/23 定例見学会 38名  
 6/29 会報106号発送(日吉地区センター)  
 7/1 ガイド学習会(菊名フラット)  
 7/2 地下壕見学会 福沢研究センター設置講座「近代日本と福沢諭吉」 101名  
 7/5 地下壕見学会 セカンドライフクラブ 18名  
 7/6 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会  
 7/14 2011年度第5回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座(来往舎中会議室)  
 7/18 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校教育研究所)  
 7/25 運営委員会(日吉地区センター)  
 7/26 地下壕見学会 コープかながわ綱島店「港北ちょボラもの会」  
     よこはま健康友の会梶山支部 30名(日本経済新聞取材)  
 7/28 定例見学会 45名  
 8/2 夏休み見学会 ヒヨシエイジ・明治学院大学原武史ゼミ・もえぎ野中学校・  
     下田小学校はまっ子ふれあいスクール他 81名  
 8/3 夏休み見学会 ヒヨシエイジ・あざみ野中学校他 43名  
 8/6 夏休み見学会 港北区役所「地域力研修」・9条の会草加他 40名(NHK取材)  
 8/8 地下壕見学会 座間市中学校教育研究会社会科部会 11名  
 8/11 定例見学会 43名  
 8/12 「戦争体験を聞き平和を語る会」参加(コープ下田店)  
 8/18～20 戦争遺跡保存全国ネットワーク三重県鈴鹿大会  
 8/22 地下壕見学会 大綱中学校2年生・先生・保護者 23名  
 8/27 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校教育研究所)  
 8/31 運営委員会(日吉地区センター)  
 9/6 地下壕見学会 翌檜の会 25名  
 9/10 地下壕見学会 愛知学院大学文学部歴史学科 後藤致人ゼミ 17名  
 ○ 日本経済新聞(8月13日)に紹介記事『学生街今むかし 日吉(横浜市)⑦』  
 ○ NHK首都圏ニュースで地下壕紹介(8月15日)

## 予定

- 9/21 会報107号発送(日吉地区センター)  
 ○ 定例見学会 9/29・10/20・11/24・12/15・1/26

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで **Tel 045-562-0443** (喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里:横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報	(年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会	郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 大西章	(加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会	